

少費・省力でも減収は許されない

指導部顧問 松浦 一 宇

地方創世との掛け声は聞こえるが、過疎化の進行は一向に止まらないどころか、二度目の東京オリンピックを控え、都への一極集中に拍車がかかっているように思えてならない。
米づくりの生産現場においても、担い手不足に伴う経営規模の拡大やAI（人工知能）を搭載した高性能農機具の普及等、農業を取り巻く環境の変化は想像を遙かに超えるものである。
米づくり農家においても変化に対応すべく必死の努力が続けられている。

栽培手法が如何にも変わろうとも良質米の安定多収なくして経営の安定はあり得ないことを肝に銘じて頑張りたいものである。

品種ごとの収量構成要素と収量目標をたてる

規模拡大に伴っての省力化は避けて通れない。
特に春作業が課題であり、直播密苗、超疎植などによる省力化が実践されている。

大事なこととは栽培方法ごとに、その特徴をしっかりと把握して取組み、慣行栽培と品質・収量共に確保されることが重要である。
① 始めに、目標をしっかりと定めること。表に示すような品種特性に合った収量構成要素を組み立てることが重要である。

表. 品種別構成要素の内容と収量 (松浦)

品種	サシキ	サシキ	はき	あきたこまち	ひとめぼれ	つや姫	コシヒカリ	どまんか
穂数/本	620本	580	500	570	440	420	520	
一穂平均粒数	62粒	58	73	62	73	76	66	
穂歩	83%	88	85	85	85	87	87	
千粒重	21.5g	22.3	21.5	22.2	22.1	21.8	22.1	
目収	690kg	660	660	660	600	600	660	

② 目標を達成するための手段（栽培技術）を考えること。
(イ) 育苗方式に適った播種量。
(ロ) 10a当たりの使用箱数。
(ハ) 育苗日数や温度管理。
目指す苗姿によって播種量や育苗日数なども大きく変わってくるものである。
うす播して健苗育成をといわれてきたが「健苗」の定義を少し見直したいと思う。
その一、うす播+適正な温度管理

理でない健苗は出来ない。
その二、密苗のような目的で超厚播でも目的に適った苗（徒長や病害が無く揃い、若々しい）写真①。
①
その三、やや厚播しても温度管理が適切で且つ健苗ローラ等も使用し2葉々身が短かめでピンと立っている苗（写真②）。
前述した通り目的に適った理想の苗を総称して健苗ではないかと思っている。

少費省力 その一 厚播で箱数を減する方法

我が家でも息子に経営移譲して以来、直播で5〜6町歩を5年間はどど実施したが、春先の代掻き水に不便が生じたりして断念。以来、厚播（180g/箱）して10a当たり20〜22箱といった少費省力栽培としていた。
くどいようだが、育苗時の温度管理を間違わなければ目的に適った健苗が出来るようである。

である。
留意点は、うす播のために特に均一播種と、良く揃った健苗が求められる。育苗期間の適温管理も重要である。
2次分けつ等、高位の分けつもある。

有効化（穂としてあてにしている）することから登熟期間はやや長めになる。
スムーズに分けつを確保するために、側条施肥体系にすることで、より安定した基盤確保に繋がるといわれる事例も多いようである。

初期生育

促進拡大が基本

写真④は穂数が十分に確保され、多収確保された登熟期のイネ。
写真⑤は軟弱徒長苗や初期からの田ワキ等で初期生育が停滞したイネで、基盤確保がままならず、結果「穂数不足」によって減収した登熟期のイネ姿である。
近年、本田移植間もない時期から田ワキが激しく、初期生育に支障が生じているとの声が多い。
対策については昨年（2018年2月号）に記述したので割愛するが、秋耕や石灰N粉の秋散布など簡単、且つ、少ない経費で出来るものから取り組むことが大切である。

少費・省力 その二

密苗による超省力化

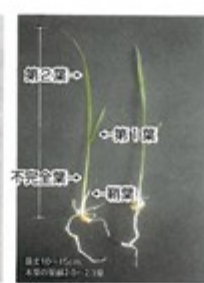
写真③にあるような250〜300gの超厚播の場合、均一な健苗及び出芽が求められるため、出芽加温（育苗機使用）がベストといわれている。
また、限られた面積（30cm×60cm）で多くの苗を育てることから、

少費・省力 その三 超疎植での省力化

前述の方法とは正逆で「うす播」で強健苗を作り、茎数確保はもっぱら分けつに頼る。1箱当たり120g播苗で10a当たり使用箱数12枚（坪当たり37株植え）といった超疎植による少費・省力化

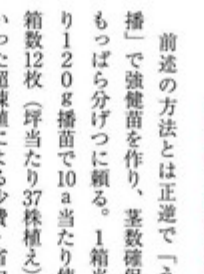


写真② 180〜200g やや厚まき苗の健苗



写真③ 1箱当たり乾籾250〜300gまきの密播

写真① 2葉が揃っていない密苗の健苗



写真④ 穂数も十分に750kg以上多収イネ



写真⑤ 穂数不足でスカスカの減収イネ